

18. 問われることに対して応えるとき

防災などの講習会やマップ作りといった活動をする時、良く質問を受けます。そのときには、できるだけの説明をさせていただきますが、十分だったかどうかはいつでも気になっています。質問する方は、間違いなく自然災害について関心が高く、またそれなりの知識も持っている方々だと思います。そのような方が、われわれに対して質問するという事は、より正確な文献に基づくような科学的知見を求めているのではなく、どのような理解の仕方をしているのかという視点からの好奇心とか、ご自身の考え方を見直すことを期待しているような気がします。

自然災害に関しての防災に対応するには、科学の知見が欠かせないのは当然です。かといって、市民の方々がすべてそれを理解しなければならないわけでもないし、不可能なことです。しかし、何とかこれまでの知見や知恵を活かして、防災に活かしたいという強い意思は感じられます。もちろん、こうすれば予知予防により被害者をなくすことが出来るということについては、万能薬がありません。

問われたときには、ものにもよるが文献を当たり、これまでの知見を整理してみますというわけにもいかず、相手もそこまでは聞いていないし、われわれもそこまで対応は出来ない、それは専門領域の研究のレベルということになると思います。そこで、われわれとしては、こんなふうに理解していますとか、このように考えて防災に活かそうとしています、というようなことをベースにおいて説明しています。もちろん、さまざまな考え方や主張があったり、推定の域で確定されたものではないこともあります。そういう意味では正確さには欠けるものの、自然災害という中で何とか避難に結び付けられるようなものを模索していることになります。万能なツールを持っているわけではないので、皆さんと一緒に地域にあった災害への対応を考えていくということです。

質問の中には、これまでの知見では解決できない、科学を超える問題もあるわけで完全に答えられるわけではありませんが、時にはアプローチする方法をお伝えできることもあります。また、自然災害が科学の細分化や社会構造ともかかわりあって複雑化しているがゆえに、われわれも質問される方も悩んでいるのだと思います。自然災害にどう対応するのかは、おそらく多様な立場の人が意見を交わすという中で、被害を少なくしたり、安全を確保するというようなことが可能になるような気がします。われわれも専門技術者の立場から、こんなふうに理解していますということを伝えられれば良いと思っています。専門知の寄せ集めだけでは市民のための防災には結びつ

かないと思います。あらゆる人が、あらゆる機会に積極的に連携する中で課題解決策に近づけると考えているところです。